

「縄文丸木舟覚え書—房総の諸事例から」補遺

高橋 統一

拙稿「縄文丸木舟覚え書」が収録された本誌第39号が刊行して間もない2005年6月に、国立歴史民俗博物館（歴博・千葉県佐倉市）で特別展「水辺と森と縄文人—低湿地遺跡の考古学」が始まり、その記念の第50回歴博フォーラムが6月28日に開催されました。

これらの概要は同名の本（歴博編：同振興会発行）とフォーラムでの配布冊子で知ることができます。

それらの中で丸木舟に関するものとして、特に注目すべき論稿が二つあります。一つは新潟県歴史博物館学芸課の荒川隆史さんの「丸木舟と青田縄文人」（上掲書所収）で、もうひとつは同じ博物館の西田泰民さんの「縄文時代の水辺の生活—縄文時代の木と生活（舟のあれこれ）」（配布冊子所収）です。お二人とも新潟県の青田遺跡での発掘調査にもとづく所論なのですが、これらには拙稿で触れた諸問題と微妙に関わる重要な事柄が論じられていますので、時宜を失ないうちにこの場を借り、「補遺」として御参考にと供したいと存じます。

荒川さんは青田遺跡について解説してから、その丸木舟の特徴と青田ムラの人々の生活圏について出土遺物より、次のように述べておられます。

縄文時代晩期終末の大規模な集落遺跡である新潟県の青田遺跡は、田園地帯で有名な新潟平野（蒲原平野とも呼ばれる）の北部にあり、かつてこの辺り一帯には芦や蒲が繁茂する湿地帯が広がり、潟湖や沼が無数に点在してしまし

た。青田遺跡のある紫雲寺潟（塩津潟ともいう）もそのひとつで、江戸時代の享保18年（1733）に干拓されるまで水深3m、面積は2,000haあったそうです。ここは平安時代に起った地震などにより地盤が沈降し、永い間その姿をみせなかったのですが、1999～2001年に日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、14,160m²について発掘調査が行われたのです。そして標高-1m～±1.6mの低湿地という恵まれた条件によって、当時の生活面がパックされていたために、おびただしい数の木柱が林立したままの掘立柱建物や、丸木舟をはじめとする多数の木製品がみつき、川辺に暮した青田縄文人の様子がよみがえりました。

丸木舟は長さ5.47m、幅0.75mのトチノキ製で、一方の先端が欠けるものの、かなり大型品です。内部には木を広げたり加工したりしやすいように故意に焦がした跡がみられます。また、舟先に横梁状の削り残し部が作り出されています。最大の特徴は舟底が平坦にカットされていること、厚さが6cmと薄く軽量化されていることです。青田ムラ周辺の低湿地帯は大小の河川が網の目状に緩やかに流れており、水深も浅かったものと推定されます。舟底に観察される擦れた跡は、川底に接触したために付いたものでしょうか。このほか、大小の櫂も出土しました。先端が尖る水かき部をもつ点の特徴であり、時には浅瀬を突き刺して進んでいたのかもしれませんが。出土した骨を見ると、魚類が大半を占めます。川にすむフナ・ニゴイ属・ウグイ属が最も多く、タイ科・スズキ・ブリ・カサゴ類などの内湾性～汽水性のもののほか、サケ

もわずかに認められます。このほか、カモ類やカモメ類といった水鳥や、ヤマトシジミやイシガイなどの貝類もあります。丸木舟に乗って川から河口域まで広範囲に移動し、漁撈活動を行っていたのでしょう。

出土した石器の石材を見ると、青田ムラを中心とする20km 圏内から獲得されたものが大半を占めています。中でも黒耀石はすべて新発田市板山・上石川を産地とする地元産のものに限られます。同じ20km 圏内には、丘陵近くの新発田市村尻遺跡や河口近くの砂丘上に位置する新潟市鳥屋遺跡といった同時期の大規模なムラが点在しています。一方、管玉などの装飾品には産地分析の結果、西日本からもたらされた可能性が高いのです。青田ムラの人々は丸木舟を利用して、石材をはじめとするさまざまな物資を運ぶとともに、他のムラとの緊密なネットワークを維持し、巧みに川辺の生活を営んでいたのでしょう。

そして西田泰民さんは荒川さんとは趣の異なる視座から、次のような示唆に富む所論を述べておられます—なお説明に用いられた付図は、ここでは割愛させていただきます。

日本国内でこれまで発見されている丸木舟は300隻を超えているといわれているが、20世紀前半前の発見例は時期の特定ができていないことが多く、発掘調査よりも偶然発見されることが多いため、確実に縄文時代に属するといえるのは120隻ほどと見られる。古くから保管されていたものすでに朽ちてしまっていたり、最近の出土であっても取り上げが難しく、保存処理費用がない、保管場所がないなどという理由でその場での記録だけが行われ、現物が残されていない場合が多い。これまで公表されている丸木舟の集成表に混乱が見られるのは、確認がとれない事例がままあるためである。舟はその材質と大きさのために実物に即した研究がしにくい遺物となっている。

大きな丸木舟は一体どこを観察したらよいのだろうか。実は他の小型の木製品に比べると、材をそのまま使っているため、幹のどの部分を使ったのかわかりやすい。それがわかるのはどちらかの端から舟の高さに視点を合わせ、断面を見るようにして観察したときである。そうすると年輪の中心が舟のどのあたりにあるかわかり、丸い材木のどの部分を削りだしているかイメージがつかめる。年輪が詰まっている方が木の北側部分であるから、どこを船底になるように舟を製作しているかも観察できるはずである。ちなみにアイヌの丸木舟の場合は目の詰まった北側を下にして製作される。同じ木の中でも密度が違うので、材の向きを考慮せずに適当に作ってしまうとバランスの悪い舟になってしまうのである。もう一つの観察のポイントは表面に炭化部分がないかである。材自体が黒ずんでいることが多いので部分部分に焦げ痕が観察される。焦がしながら削ったといわれているが、単にあぶっただけでは生木状態よりかえって硬化させてしまい削りにくくなることがある。むしろ世界各地の事例に見られるように不要部分を燃焼させて嵩を減らすテクニックが使われていたと考えてもよいであろう。

発見されている縄文時代の舟は浅いものが非常に多い。舟の長さがいくらあっても、人数がたくさん乗ればそれだけ重心が高い位置になるので舟の安定性は失われる。また投網のような立ち位置での動作がこうした浅い舟で可能であったか疑問を感じ得ないところである。

青田遺跡の丸木舟のように底面が平たい舟の例は多くない。底面が丸い形態の舟と比較してみると、底面が平たい舟は水平の時は安定性が高いが、傾いた場合は浮力を受ける部分が大きく減少し、横波を受けた場合には丸い場合よりも大きく傾いて急激に安定性を失う。したがってこのような舟が波の静かな内水面用であるという蓋然性は高い。

もちろん植物が生い茂った中を航行するとき底が平であった方が便利であったことも否め

ないであろう。

出土丸木舟にはほとんどの場合、保留綱を結びつけるような穴や突起は設けられていないので、使わないときには浮かべておくのではなく、浜や岸に引き上げておかねばならなかったはずである。そのためには底が平らであるよりも、接地面積の少ない丸い底の方が良さそうである。これに関連して不思議なのは碇といわれる大きな石の存在で、舟の側には肝心の碇の綱を固定する場所がない。

舟を進めるには櫂をもちいた。オールのような固定式ではなく、カヌーのようなこぎ方であったと考えられる。なお、オール型のこぎ方は必ずしも西洋のものではなく北方民族では使用されていて、江戸時代のアイヌの舟の記述で車櫂と呼ばれているのがそのことである。縄文時代の櫂は早期から出土例があるものの、完形品はわずかである。長い柄の部分と比較的細長い水かき部分からなるのが共通の特徴である。水かき部分の幅が狭いものや小さいものは掘り棒とまぎらわしく、誤って報告されている可能性がある。

こうした装備でどの程度の速度が出たのか興味のあるところだが、琵琶湖や新潟佐渡間の実験航海の結果では時速4～5キロ程度で航行できたとのことである。

弥生時代になると西日本では櫂の形態が変化したようである。縄文時代のものに比べると水かき部分の面積が小さく、形も楕円形や菱形に近くなるものがある。これは弥生式土器や銅鐸に描かれた櫂の形にも似ており、忠実に形を描いているようで興味深い。

お礼及びお詫びと訂正

先の拙稿について、多くの方が読後の御感想をお寄せ下さいました。当初、専門外の考古学領域に踏みこむことへの躊躇や不安があったのですが、いまはやってよかったと思っております。いろいろと御教示下さった皆様、どうも有難うございました。あらためて御礼申し上げます。

す。

なお、その拙稿で書いた事柄のうち、いくつかの誤りがあるのを、その情報を提供して下さいました市原寿文さんから御指摘がありました。それらが私の不注意によることがわかりましたので、ここでお詫び申し上げ、訂正させていただきます。

拙稿のI章 千葉市落合遺跡 1「丸木舟発掘の経緯」のp.5の記述で、同遺跡の発掘に参加した東洋大の学生のうち、リーダー格の大和久震平さんは当時、「津田沼に下宿しており」と書いてしまいましたが、これは「自宅に住んでいた」のだそうです。また同じ学生の宮本義孝さんの専攻を「社会学」と書きましたが、これも「史学」に訂正いたします—宮本さんは卒業後に社会学科の副手となり、その領域の研究者の道を歩まれたとのことでした。

それから、同じp.5に「守屋美都雄先生は落合遺跡に直接来られなかったが、後任の和島誠一先生は発掘調査が終った頃に見えられた」と書きましたが、これも誤りで守屋先生は二三次発掘を見に来て下さり、他方、和島先生が来られたことはない、ということです。

なおもうひとつの訂正は、拙稿の末尾の「お世話になった方々」のうち、美ノ谷新子さんの所属を立正大学としてしまいましたが、正しくは東邦大学医学部です。御本人はもとより、関係の方々にも御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。